

Title	大学生における自我同一性地位と進路成熟態度の関連
Author(s)	吉中, 淳
Citation	弘前大学教育学部紀要. 115-2, p.67-75, 2016
Issue Date	2016-10-14
URL	http://hdl.handle.net/10129/6249
Rights	
Text version	publ isher



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

大学生における自我同一性地位と進路成熟態度の関連

The Relations between Identity Status and Career Maturity of University Students

吉 中 淳*

Atsushi YOSHINAKA*

論文要旨

本研究の目的は、自我同一性地位の判定に広く使われる加藤 (1983) の尺度の問題点を坂柳・竹内 (1986) による進路成熟態度尺度から検討することにある。国立大学の大学生151名に質問紙を配布して検討した。結果は以下の通り。①加藤の尺度は同一性達成と同一性拡散の分類について概ね妥当であった。②早期完了は実際にはD-M中間地位に分類されていた。③D-M中間地位は複数の性質の異なる群の混合であった。④D-M中間地位の中に進路への関心は高いが自律度・計画度が低いという特色あるグループが見出された。

キーワード：大学生 自我同一性地位 進路成熟態度 早期完了 D-M 中間

問題と目的

Erikson (1950,1959) が青年期の発達課題として、自我同一性の達成 対 自我同一性の拡散という課題を提唱して以来、この発達課題を具体化し、測定する試みが為されてきている。その中でも特に有名なのは Marcia (1966) による自我同一性地位 (identity status) という概念で把握しようという試みである。この枠組みでは、傾倒 (commitment 自分自身の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動すること) の有無と危機の経験 (その人にとって意味のあるいくつかの可能性について迷い、決定しようとした時期を経験したことがあるかどうか) という二つの基準を用いて、自我同一性の達成という青年期の発達課題への取組状況を4類型に分類した。すなわち、危機の経験を経て傾倒へと至った「同一性達成」、今まさに危機を経験していて、傾倒へと至りつつある「積極的モラトリアム (単にモラトリアムとされることもあるが、本稿では積極的モラトリアムに統一)」、危機を経ないで傾倒へと到達した「早期完了 (権威受容、予定アイデンティティなどと訳されることもあるが本稿では早期完了で統一)」、傾倒に至っていない「同一性拡散 (この中には危機を経験した者と、危機を全く経験していない者との二種類がある)」、以上の4つの類型に分けて考える。

Marcia (1966) は、面接と文章完成法を使って分

析し、どの類型に分類するかを決定した。質問する領域は青年にとって重要とされる「職業」と「イデオロギー (宗教・政治)」の領域に關してであるが、日本では、イデオロギーに関する内容は割愛して、職業領域に限定することも多い。

Marcia (1966) のアイデアは面接法では大量のデータを扱うのが難しかったり、回答の客観的把握が難しかったりすることなどから、質問紙調査で代替するという発想が出てくるのは極めて自然である。加藤 (1983) は、このような質問紙法で自我同一性地位を把握しようとする試みでの一つであり、多くの研究で引用されている。加藤の同一性地位判定尺度は、「過去の危機」に加え、傾倒を「現在の自己投入」「将来の自己投入の希求」という二つの下位尺度で検討する。まず、「現在の自己投入」の高低で分け、この値が高かった者を「過去の危機の経験」の値で、高い方から順に「同一性達成」「A-F 中間」「権威受容 (早期完了)」に分類する。一方で、「現在の自己投入」の低い群では、「将来の自己投入の希求」の値で、高い方から順に「積極的モラトリアム」「D-M 中間」「同一性拡散」に分ける。

しかしながら、この尺度には①半数以上がD-M中間地位 (拡散と積極的モラトリアムとの中間) に該当する ②早期完了に該当する者が1割を切る という分類の偏りによる扱いにくさが指摘されている。最初

* 弘前大学教育学部学校教育講座
Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

の加藤（1983）の報告の時点で、D-M 中間に該当する者は53.2%、早期完了に該当する者は4% というような割合であった。このような分布状況となるのは、実態を反映しているのかもしれない。だが、改めて本当にそうなのかは検証してみる必要はあるだろう。実態をもし反映していないとしたならば、尺度の妥当性や信頼性に問題がある可能性をまず考えなくてはならない。さらに、尺度そのものは問題は無いのだが、そこから類型に分類する際の手順に何らかの点で不適切な点があるという可能性もある。例えば、下位尺度の値が高い群と低い群とを識別する点数が適切であるかどうかという点が一つ。もう一つは「現在の自己投入」を最初に分類規準としてから「過去の危機」「将来の自己投入の希求」といった規準を投入するという順番が適切であるかという問題である。

加藤の下位尺度にどんな問題があるのかについて、具体的に検討した研究はあまりないが、例えば福島ら（2013）の判別分析を使った研究では、拡散群とそれ以外の群とを判別することは比較的うまくいくが、達成群と積極的モラトリウム群の判別はうまくいかなかった。言い換えるならば「将来の自己投入の希求」による判別は比較的うまくいったが、「現在の自己投入」「過去の危機の経験」を使った判別はあまりうまくいかなかったということが示唆されている。

分類の手順を考える際には、現実にはどのような順序で同一性地位が変遷していくかどうかの検討も必要である。最初の状態が、同一性拡散であるとして、そこから同一性達成に到達するまでにはどのような道筋をたどるのか。例えば、Côté & Levine（1988）は、Marcia（1966）のモデルは、同一性拡散の次の段階は早期完了であり、その後積極的モラトリウムが続き、最後に同一性達成へ移行するという単線的で不可逆的な順序を想定していると整理している。この理解の通りであるのならば、加藤のいうような、早期完了とは別のカテゴリーとしてのD-M 中間地位という地位が存在する余地はない。Coteら自身は、このモデルを修正して①同一性拡散と早期完了は行ったり来たりする ②同一性拡散から早期完了を経ずに直接積極的モラトリウムに移行する場合もある。この場合も、同一性拡散と積極的モラトリウムも行ったり来たりする ③早期完了から積極的モラトリウムへの移行は不可逆的である ④積極的モラトリウムから同一性達成への移行は行ったり来たりするという特徴を持つモデルを作り上げた。

いずれにせよ、積極的モラトリウムから早期完了

への移行という順序は想定されていない。「危機の経験」がないのが、早期完了の特徴であり、「危機を経験中」というのが積極的モラトリウムの特徴であるのだから、原理的に考えれば確かに積極的モラトリウムから早期完了への移行を想定するのは難しいといえるだろう。加藤の尺度では、早期完了に分類される割合が極端に少ないのは分類の手順と発達の移行の順序とに齟齬があることも理由の一つかもしれない。つまり、早期完了の本質は、自己投入をしているということよりもむしろ、過去の危機の経験の無さにあり、分類の順番としては、過去の危機の経験の有無によって、まず、「拡散群（危機経験無し）・早期完了群」と「達成群・積極的モラトリウム群・拡散群（危機経験有り）」に分け、そこから自己投入の在り方によって、各類型に分けるという手順の方が理に適っていると考えられる。現行の加藤のやり方では、最初の「現在の自己投入」の分類規準が厳しすぎた場合、本来、早期完了に分類されるべきグループがD-M 中間などに誤って分類される恐れがある。

このような問題点から加藤の尺度の見直しが近年行われている。西田・沖林・大石（2011）はD-M 中間地位の者を過去の危機の経験の得点の高さによってさらに3つの群に細分するという分類を提唱している。中間ら（2015）は、加藤の尺度に代わる尺度の作成の試みとして、Grotevant（1987）やLuyckxら（2008）などの知見も取り込み、自我同一性地位の可逆性も視野に入れた多次元アイデンティティ発達尺度を開発した。そして、D-M 中間地位という類型を採用せず、新たに「達成」「早期完了」「探索モラトリウム」「拡散型拡散」「無問題化型拡散」の5類型への分類のし直しを提唱する。

このように、加藤の尺度について、今、見直しが行われているが、本研究では、単に新しい尺度を提唱するのではなく、改めて加藤の尺度の持つ意味を別の尺度との関連性から検討を行い、加藤の尺度に問題点があるとしたら具体的にどこにあるのかを特定することを目指す。また、D-M 中間地位についても豊嶋・芳野・遠山（1992）のように、アイデンティティの確立が未達成という特有の性質を見出す見解もあり、単に切り捨てるのではなく、具体的な問題点をほかの尺度から改めて検討する。

比較の対象として選んだのは、進路成熟尺度である。浦上（1993）が「心理学の中では成熟という言葉は生物学的・遺伝的に決定された変化ととらえることが多いが、ここで用いられる成熟にはそういう意味

は薄い」と述べているように、キャリア教育の文脈では、生物学的・遺伝的に発達メカニズムを説明するための概念ではない。最初に進路成熟の概念を提唱した Super (1955) は、成熟とは「発達の段階、すなわち探索の段階から衰退の段階に至る職業的発達の連続体上において到達された段階」と定義していた。竹内・坂柳 (1982) は、Super (1955,1957) や Crites (1961,1965,1973)、中西 (1976)、広井・中西 (1978) らの議論を整理して「成熟」は「発達」を置き換えたもので「進歩的变化」という価値志向的側面を強調したのだと述べる。このように研究領域としての自我同一性地位と進路成熟の目指す方向は、職業を中核領域とすることや、多少の後戻りは想定しつつも、同一性拡散から同一性達成へという方向性を想定するという点で共通しているといえる。実際に Tiedman & O' Hara (1963) のように、「進路発達には、自我同一性を形成する心理社会的過程の中で発展する労働への指向性の発達も含まれる」と直接的に表現している論者もいる。

こうした Super らの考えに触発されて中西 (1976) が開発した CDT (進路発達検査) は、進路希望プロフィール、進路知識、職業的統覚検査、進路成熟の4領域から構成され、進路成熟は独立性・計画性・自発性の3側面から測定を行う。また、竹内・坂柳 (1982) ならびにそれを発展させた坂柳・竹内 (1986) は、CDT 中の進路成熟に対応する考えに基づいて進路成熟態度尺度と題し、自律度・計画度・関心度の3側面を検討している。この尺度はその後、浦上 (1993) のように、進路発達の状況を記述するための道具としてしばしば用いられる。ただし、3つの側面から得られた結果をどのように統合するかについては困難があるように見受けられる。本研究では進路成熟態度尺度の3側面からの検討に加えて、階層的クラスタ分析により、類型化を行い、自我同一性地位の類型との異同を検討する。

本研究の目的は Marcia (1966) の概念を維持しつつ加藤の尺度は同一性地位の尺度として妥当か進路成熟という側面から検討することにある。特に検討したいことは二つある。一つは加藤の尺度で早期完了を正しく判別できているかどうか、つまり、加藤の尺度では早期完了とは分類されない者の中に早期完了に分類するのが適切と考えられるグループがないかどうかを検討する。もう一つは、論者によって見解が分かれる D-M 中間の位置づけを整理することである。D-M 中間は、典型的な類型からあぶれたグループに過ぎな

いのか、それとも何か意味のあるグループといえるのかどうか。また D-M 中間は均質な類型といえるのか、それとも異質な集団の混合なのかどうか。これらの点について中心に分析を行っていく。

方法

1) 手続き・対象者

2014年6月、H 大学生151名を対象に質問紙調査を実施した。内訳は、性別は男子67名、女子84名。学部は教育学部23名、人文系49名、農学系26名、理工学系21名、医学系32名。学年は1年生138名、その他13名である。

2) 質問項目

(1) 自我同一性地位判別尺度 加藤 (1983) の自我同一性地位判定尺度を用いた。現在の自己投入・過去の危機・将来の自己投入の希求の3側面について、各4項目、1～6の6件法で尋ね、加藤の判定基準によって全部で6つの地位に分類した。

(2) 進路成熟態度尺度 CMAS-4 (坂柳・竹内,1986) の尺度のうち、進学に関する尺度は用いず、職業に関するもののみについて進路自律度、進路計画度、進路関心度の3側面を測定する。各下位尺度は5項目から構成され、1～3の3件法で回答を求める。

結果

同一性地位判別尺度の基本的情報

同一性地位判定尺度の下位尺度の平均値と標準偏差は、現在の自己投入 $M=15.7$ $SD=4.09$ 、過去の危機の経験は $M=16.5$ $SD=3.47$ 、将来の自己投入の希求 $M=15.8$ $SD=3.41$ であった。同一性地位判別尺度の下位尺度の内的一貫性を確認したところ、現在の自己投入は $\alpha =.827$ 、過去の危機の経験は $\alpha =.569$ 、将来の自己投入の希求は $\alpha =.621$ であった。

自我同一性地位は、同一性達成6名 (4.2%)、A-F 中間12名 (8.4%)、早期完了2名 (1.4%)、積極的モラトリアム15名 (10.5%)、D-M 中間93名 (65.0%)、同一性拡散15名 (10.5%) となっている。

進路成熟態度尺度の基本的情報

進路成熟態度尺度の下位尺度の平均値、標準偏差、中央値を以下に記す。自律度は $M=6.58$ $SD=1.78$ 、中央値は7.00であった。計画度は $M=5.85$ $SD=2.68$ 、中央値は6.00であった。関心度 $M=7.25$ $SD=1.82$ 、中央値は7.00であった。進路成熟態度尺度の内的一貫性は、自律度 $\alpha =.570$ 、計画度 $\alpha =.615$ 、関心度 $\alpha =.586$

表 1 自我同一性地位別 進路成熟度の平均値・標準偏差

	自律度		計画度		関心度		度数
	M	SD	M	SD	M	SD	
同一性達成	7.83	1.72	8.17	2.40	8.33	1.51	6
A-F 中間	6.50	1.68	7.33	2.06	8.00	2.09	12
早期完了	7.50	2.12	7.50	2.12	5.50	3.54	2
積極的モラトリアム	7.60	1.59	6.33	2.72	8.40	1.24	15
D-M 中間	6.51	1.75	5.77	2.61	7.06	1.81	93
同一性拡散	5.07	1.27	3.50	1.91	6.64	1.69	14
合計	6.55	1.78	5.87	2.67	7.27	1.85	142

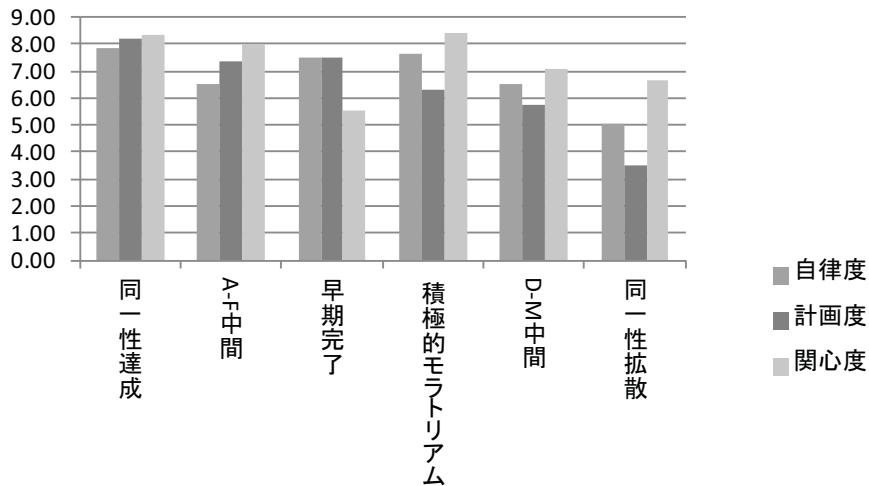


図 1 同一性地位別進路成熟態度

表 2 自我同一性地位による進路成熟態度の比較の分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F	p	多重比較
自律度	群間	57.21	4	14.30	5.03	.00	拡散 < D-M 中間, 積極的モラトリアム, 達成
	群内	383.61	135	2.84			
	合計	440.82	139				
計画度	群間	139.98	4	34.99	5.54	.00	拡散 < D-M 中間, 積極的モラトリアム, A-F 中間, 達成
	群内	846.54	134	6.32			
	合計	986.52	138				
関心度	群間	41.64	4	10.41	3.35	.01	(有意差の出た組合 せなし)
	群内	419.76	135	3.11			
	合計	461.40	139				

であった。

自我同一性地位と進路成熟態度との関連

自我同一性地位別に進路成熟態度尺度の平均値と標準偏差を示したものが表 1 ならびに図 1 である。

人数の少なかった早期完了群を除外して、自我同一性地位別に一要因分散分析で進路成熟度を比較したところ、それぞれ自律度、計画度、関心度で有意差が見られた(表 2)。TUKEY 法で多重比較を行ったところ自律度と計画度では、同一性拡散群のみが突出して低いことがわかった(自律度では A-F 中間地位以外

の全ての群との間で有意差がみられた。計画度では全ての群との間で有意差が見られた。関心度は多重比較で有意差は見られなかった)。

自我同一性地位と、進路成熟態度尺度の得点をおおよそ中央値で分けて分布状況を検討したのが表 3 である。簡単に特徴を述べると、同一性達成群は 6 人中 4 人が 3 尺度全てが高い。同一性拡散群は 14 人中 8 人が 3 尺度全てが低い。積極的モラトリアム群は 3 尺度全てが高い者が最も多くて 15 人中 8 人。関心度・自律度は高いが計画度のみ低い者 4 名がこれに次ぐ。早期完了群は 2 名しかいないため、傾向は見出し難いので、

表3 自我同一性地位と進路成熟態度の人数分布

	自律度		低				高				計
	計画度	関心度	低		高		低		高		
			低	高	低	高	低	高	低	高	
同一性達成	1	0	0	1	0	0	0	0	4	6	
A-F 中間	0	3	1	1	0	1	0	6	12		
権威受容	0	1	0	0	0	0	0	1	2		
モラトリアム	1	0	1	1	0	0	4	8	15		
D-M 中間	15	12	11	2	10	16	7	19	92		
同一性拡散	8	1	1	1	1	1	1	0	14		
合計	25	17	14	6	11	18	12	38	141		

表4 自我同一性地位判別尺度の下位尺度と進路成熟態度の相関

	自律度	計画度	関心度
現在の自己投入	.401**	.594**	.271*
将来の自己投入の希求	.341**	.272*	.329**
過去の危機の経験	.250*	.216	.311**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表5 クラスタ別 進路成熟態度（標準得点）の平均値・標準偏差

	自律度		計画度		関心度		度数
	M	SD	M	SD	M	SD	
クラスタ1	-1.31	0.67	-0.56	0.76	0.57	0.59	24
クラスタ2	0.84	0.48	0.46	0.81	0.78	0.61	52
クラスタ3	0.03	0.63	0.75	0.62	-0.57	0.77	33
クラスタ4	-0.33	0.89	-0.86	0.75	-0.87	0.72	41

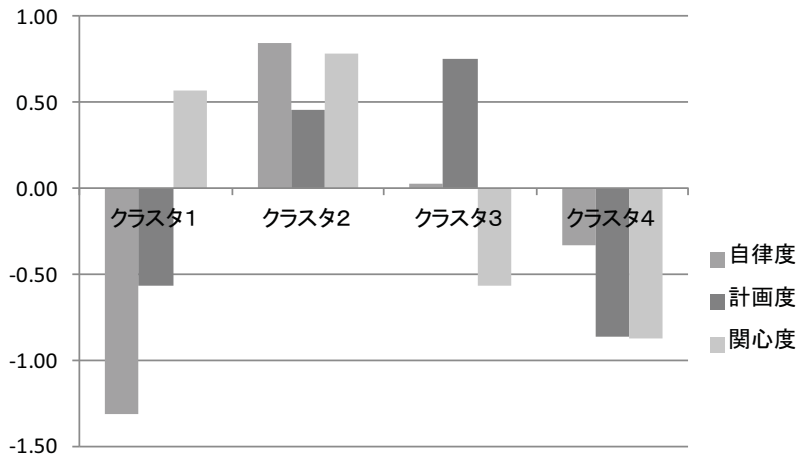


図2 進路成熟態度のクラスタ分析

代わりに A-F 中間地位群をみると、3 尺度全てが高い者が最も多くて12人中6人だったが、これに次ぐのは、関心度・自律度は低いが計画度のみ高い者3名だった。

最後に、自我同一性地位判別尺度の下位尺度と進路成熟態度の相関を表4に示す。

進路成熟態度のクラスタ分析による分類

進路成熟態度の標準得点を用いて、Ward 法、平方ユークリッド距離による階層クラスタ分析を行ったところ、図2のような4つのクラスタが抽出された。クラスタ1は関心度のみ高く、自律度が突出して低い

群、クラスタ2は全部高い群。クラスタ3は関心度は低く、計画度のみ高い群、クラスタ4は全部低い群となる。群間での各成熟度の平均値を表5に、一要因分散分析と TUKEY 法による多重比較の結果を表6に示す。また、進路成熟態度を中央値を元に高群・低群に分け、クラスタとクロス表を作成したものが表7である。クラスタ1は、全員が自律度低群に属す。また、その中でも関心度が高い者が比較的多い。クラスタ2は、逆にほぼ全員が自律度高群に属し、関心度・計画度も比較的高い。クラスタ3は、ほぼ全員が計画度は高いが関心度は低い。クラスタ4はとにかく関心度と計画度が低い。

表6 クラスタ間の進路成熟態度の比較の分散分析

		平方和	df	平均平方	F	p	多重比較
自律度	群間	82.556	3	27.519	60.468	.00	CL1<CL4,CL3<CL2
	群内	66.444	146	0.455			
	合計	149	149				
計画度	群間	74.063	3	24.688	48.099	.00	CL1,CL4<CL3,CL2
	群内	74.937	146	0.513			
	合計	149	149				
関心度	群間	81.681	3	27.227	59.049	.00	CL4,CL3<CL1,CL2
	群内	67.319	146	0.461			
	合計	149	149				

表7 クラスタごとの進路成熟態度の高低の分布

	低				高				計
	自律度		関心度		自律度		関心度		
計画度	低	高	低	高	低	高	低	高	
クラスタ1	6	0	14	4	0	0	0	0	24
クラスタ2	0	0	1	0	0	5	9	37	52
クラスタ3	0	12	0	2	2	14	0	3	33
クラスタ4	19	7	0	0	11	0	3	0	40
合計	25	19	15	6	13	19	12	40	149

表8 クラスタごとの自我同一性地位の分布

	同一性地位						合計
	同一性達成	A-F 中間	早期完了	積極的モラトリアム	D-M 中間	同一性拡散	
クラスタ1	0	2	0	2	14	5	23
クラスタ2	3	6	1	11	27	1	49
クラスタ3	2	3	0	0	25	1	31
クラスタ4	1	1	1	2	27	7	39
合計	6	12	2	15	93	14	142

表9 クラスタ別 自我同一性判定尺度の下位尺度（標準得点）の平均値・標準偏差

	現在の自己投入		過去の危機の経験		将来の自己投入の希求		度数
	M	SD	M	SD	M	SD	
クラスタ1	-0.45	1.20	-0.13	0.89	-0.13	0.81	24
クラスタ2	0.53	0.72	0.41	0.92	0.56	0.93	51
クラスタ3	0.06	0.75	-0.35	0.98	-0.19	0.84	32
クラスタ4	-0.39	0.97	-0.12	1.02	-0.44	0.98	41

表10 クラスタ間の自我同一性判別尺度の下位尺度の分散分析による検討

		平方和	df	平均平方	F	p	多重比較
現在の自己投入	群間	25.529	3	8.510	10.728	.00	CL1,CL4<CL2
	群内	114.223	144	.793			
	合計	139.752	147				
過去の危機の経験	群間	13.504	3	4.501	4.918	.00	CL3,CL4,CL1<CL2
	群内	129.981	142	0.915			
	合計	143.484	145				
将来の自己投入の希求	群間	25.439	3	8.480	10.208	.00	CL4,CL3,CL1<CL2
	群内	119.624	144	0.831			
	合計	145.063	147				

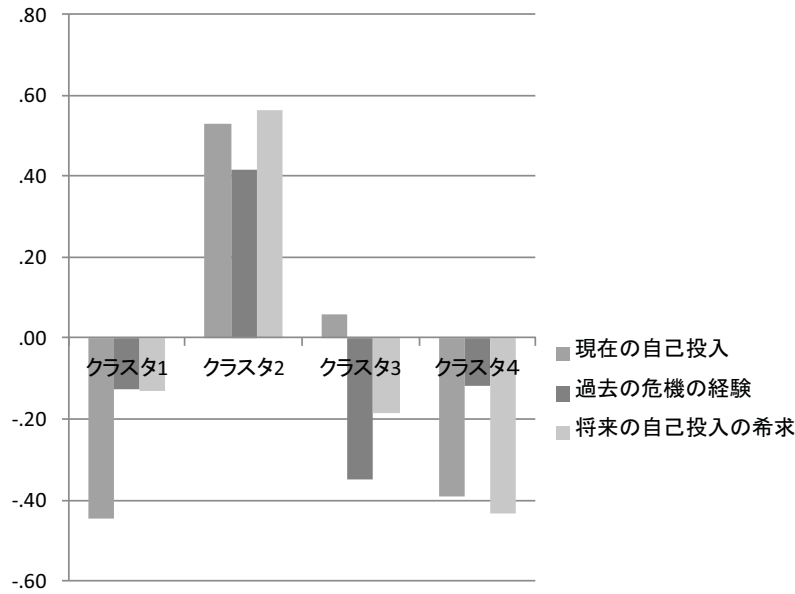


図3 クラスタと同一性地位下位尺度

このクラスタ分析による群分けと自我同一性地位とのクロス集計を行った結果が表8である。D-M中間は各クラスタにほぼ均等に散らばった。D-M中間が一つの類型としてまとまっていると考えるのは困難であると考えられる。以下、各クラスタの特徴をその他の群の分布状況をもとに検討する。

まず、クラスタ2をみると、同一性達成とA-F中間地位の半数がこのクラスタに属し、また、積極的モラトリアムの15人中の11人がこのクラスタに属すなどの特徴がみられた。その一方で同一性拡散に該当する者が1名のみであった。以上のことからこのクラスタは4群中、最も進路に対して積極的に取り組んでいる群と考えられる。

その次に進路成熟が進んでいるように見えるのは、クラスタ3である。同一性達成とA-F中間地位に属する者の数はクラスタ1に次ぐ。ただし、31人中25人と実に80.6%がD-M中間地位に属する。

同一性拡散地位はクラスタ1とクラスタ4の2群でほぼ分け合う形となっている。

クラスタ間の特徴をさらに詳しく検討するために、加藤(1983)の自我同一性地位判定尺度の下位尺度の得点を標準得点に変換し、クラスタ間で比較した結果が図3である。また、平均値、標準偏差を表9に、一要因分散分析とTUKEY法による多重比較の結果を表10に掲載する。クラスタ3において「現在の自己投入」が若干平均を上回ったのを除けば3尺度とも、平均値を上回るのはほぼクラスタ2に限られ、1強3弱

といった様相を呈している。多重比較の結果でも、クラスタ2は、現在の自己投入でクラスタ3との間に有意差が見られなかったのを除き、ほかのクラスタとの間の全ての比較で有意差が見られた。

クロス集計ではあまりはっきりしなかったが、クラスタ3は「現在の自己投入」こそ平均点を上回るが、クラスタ2と比較して「過去の危機の経験」が有意に低いこと、そして、成熟度の得点に関しても、計画度のみが高くほかの2尺度は低いという特徴から判断しても、この群は早期完了を示す群とみなしてよいように思われる。

クラスタ1とクラスタ4を比較すると、違いは有意差こそないものの「将来の自己投入の希求」にあり、クラスタ1はこの下位尺度のみ比較的平均に近い。しかしながら、このことを以て、クラスタ1が積極的モラトリアムを表す群ともいいにくい。クラスタ1は成熟度から検討すると、自律度が低く関心度のみが高いのだが、このことは進路について結果を出すことには関心があるが、その結果を出すまでのプロセスに責任をとろうというわけではないことを示唆している。その意味で、クラスタ1は概念的にはまさにD-M中間、すなわち、拡散とモラトリアムの中間ということになると考えられる。そして、成熟度と同一性地位判別尺度の下位尺度全てが平均よりも低いクラスタ4こそが同一性拡散群であると見るのが妥当と考えられる。

考 察

本研究では、加藤（1983）の自我同一性判別尺度と、坂柳・竹内（1986）の進路成熟態度尺度との関連を検討した。まず、大前提として同一性達成群は、進路成熟度が3側面全てで高く、同一性拡散群は3側面全てが低いという結果は得られた。ただし、その中間形態といえる早期完了とD-M中間については、考えの修正を迫る結果が示唆された。

加藤の尺度では、早期完了がほとんどいないことが指摘されてきた。それには、そもそも早期完了に該当する者がほとんどいないという理由と、尺度の信頼性・妥当性に問題があったり群分けの手順が不適切であるという理由の二つが考えられた。今回の進路成熟度からの検討結果では、自律度も関心度も低いのに計画度だけは高いという、概念的には、早期完了の該当すると考えられるグループの存在が確認された。つまり問題点は実際の分布にあるのではなく、加藤の尺度に内在することが示唆された。このグループは加藤の尺度では早期完了ではなくD-M中間地位に分類され、しかもその約4分の1を占めていた。今回の分析では、加藤の尺度の下位尺度は、信頼性係数の値はそれほど高いとはいえないものの、ほかの尺度との関連の仕方は、概ね理解可能な結果が得られているので、問題点はどちらかという、分類手順にあると考えられる。

D-M中間群は、今回の分析では、一つの均質な群を形成しているのではなく、複数の種類の混合であるということが強く示唆された。その中には、早期完了や同一性達成・同一性拡散に分類するのが適切と考えられる者もそれぞれ4分の1程度見られたが、残りの約15%程度は、関心度だけが高く、自律度や計画度は低いというグループであった。このグループを指す適切な名称はない。進路の問題について全くの無関心ではないので拡散型とは呼べないが、さりとて自律度が欠けているので、積極的モラトリアムとも呼べない。このグループこそ、真の意味でのD-M中間ということなのかもしれないが、これまでの加藤の尺度の名称と紛らわしいので、ここでは関心先行群と仮に名付けておく。今後はキャリア教育の対象として注目すべき集団と考えられる。

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。基本的なことであるが、今回使用した同一性地位判定尺度も坂柳・竹内の進路成熟態度尺度もいずれも内的整合性があまり高くはなかった。このことから今回の結果が妥当であるかどうかについては、引き続き、他

のより信頼性の高い尺度と併せての検討が必要である。また、今回の対象者のほとんどは大学1年生で、調査時期は6月である。この時期は就職活動などはまだ先のことと考えている者が多いと考えられる。それゆえ、Marcia（1966）が述べるような、危機の経験がある同一性拡散や、中間ら（2015）のいう拡散型拡散などの類型が存在することは想定していない。研究対象をもう少し年齢が上の段階に広げるのであれば、このような一度は別の同一性地位に移行しながら同一性拡散に戻ってきた者の特徴も検討できるような対策をとる必要がある。以上の2点から、今後は中間ら（2015）のDIDS-Jなどのような別の尺度との関連を検討する必要がある。

引用文献

- Côté, J. E., & Levine, C. (1988). A critical examination of the ego identity paradigm *Developmental Review*, 7, 273-325.
- Crites, J.O. (1961). A model for the measurement of vocational maturity. *Journal of Counseling Psychology*, 8, 255-259.
- Crites, J.O. (1965). Measurement of vocational maturity in adolescence: Attitude Test of the vocational development inventory. *Psychological Monographs*, 79.
- Crites, J.O. (1973). *Career Maturity Inventory, manual for administration*. McGraw-Hill.
- Erikson, E.H. (1950). *Childhood and society*. New York: W.W.Norton.
- Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. *Psychological Issue*, 1, 1-17.
- 福島裕敏・豊嶋秋彦・吉崎聡子・平岡恭一・吉中淳（2013）. 教員カリキュラム改革は卒業時の学生に何をもたらしたか—自我同一性を中心に—弘前大学教育学部紀要, 109, 73-81.
- Grotevant, H.D. (1987). Toward a process model of identity formation *Journal of Adolescent Research*, 2, 203-222.
- 広井甫・中西信男（1978）. 学校進路指導 誠心書房.
- 加藤厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究, 31, 292-302.
- Luyckx, K., Schwartz, S.J., Bersenky, M.D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, 42, 58-82.
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego identity status *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 中間玲子・杉村和美・畑野快・溝上慎一・都築学（2015）. 「多次元アイデンティティ発達尺度（DIDS）によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み」 心理学研究, 85, 549-559.
- 中西信男 1976 進路発達検査（CDT-2）の研究 大阪大学人間科学部紀要, 2, 11-160.

- 西田若葉・沖林洋平・大石英史(2012). 大学生の多元的アイデンティティと適応機能の関連 山口大学教育学部研究論叢(芸術・体育・教育・心理), 61, 81-92.
- 坂柳恒夫・竹内登規夫(1986). 進路成熟態度尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 35, 169-182.
- Super, D.E.(1955). The dimensions and measurement of vocational maturity. *Teachers College Record*, 57, 151-163.
- Super, D.E.(1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development* New York: Harper & Brothers.
- 竹内登規夫・坂柳恒夫(1982). 進路成熟態度尺度(CMAS-1)の作成と項目分析, 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 31, 93-210.
- Tiedman, D.V. & O'Hara, R.P.(1963). *Career development: Choice and adjustment*. College Entrance Examination Board.
- 豊嶋秋彦・芳野晴男・遠山宣哉(1992). 自我同一性地位の発達の变化と学校教育・教育相談 弘前大学保健管理概要, 14, 21-33.
- 浦上昌則(1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連(1993). *教育心理学研究*, 41, 358-364.
- (2016. 8. 8 受理)